

上海華興商業銀行綜合社宅（設計：前川國男建築設計事務所） における住戸計画と空間構成

[論文]

—収蔵資料の分析から得られた知見—

小林 克弘*

Planning of Residential Unit and Spatial Composition in Shanghai Hua Hsing Commercial Bank Dormitories designed by Mayekawa Kunio

— Some Findings Obtained by Analyzing Collected Materials

KOBAYASHI Katsuhiro

The Shanghai Hua Hsing Commercial Bank Dormitories, a representative of the prewar works of Kunio Mayekawa Architects, was displayed in the "Designing Houses - Masterpiece House from NAMA's Collection 1940-1975" (December 14, 2021 to March 13, 2022) held by the National Archives of Modern Architecture. In preparation for the exhibition, the collection materials were analyzed and scrutinized. The purpose of this paper is to summarize the findings obtained at that time to use as a useful basic material for the future research. In particular, the following points became clear.

- 1) By examining the date of the drawings investigated was when the square shape was changed to the C shape.
- 2) The characteristics of the five dwelling unit types were confirmed concretely in the drawings.
- 3) Clarified are some features regarding the scale of drawings and the characteristics of how to draw.

キーワード：国立近現代建築資料館、令和3年度収蔵品展「住まい」の構想、集合住宅、スキップフロア、メゾネット、住戸タイプ

1. はじめに

1.1. 本稿の目的

上海華興商業銀行綜合社宅は、前川國男建築設計事務所の戦前の実施作品の代表的存在であるのみならず、戦中期に実現した近代建築として創意工夫に満ちた秀作である。しかしながら、上海郊外に建設され、直接見ることが難しかったため、これまで、大きく取り上げられることが少なかった。

文化庁国立近現代建築資料館が開催した「令和3年度収蔵品展「住まい」の構想 収蔵資料が語る名作住宅1940-1975」（2021年12月14日から2022年3月13日）において、上海華興商業銀行綜合社宅の収蔵資料の展示を行った¹。その展示準備のために、収蔵資料の分析と精査を行う過程で、この作品に関する様々な事実を見つけることができた。本稿は、その際に得られた知見をまとめておくことで、この作品に関する今後の研究にとって有用な基礎資料とすることを目的とする。

1.2. 施設の概要

華興商業銀行綜合社宅は1939年（昭和14年）に上海で設立された日中共同出資の銀行の大規模社宅であり、前川國男建築設計事務所の上海分室において1939年夏から半年強で設計がなされ、実施図面を作成する間

の1940年1月に着工し、1941年の秋には第一期工事竣工という速さで建設された集合住宅である²。

この施設は、上海市の中では北東部に立地し、中心部から北に数キロメートルに位置する未開拓の地区を敷地として、東社宅（日本人行員用）と西社宅（華人行員用。華人という表現は図面に従った）から成る。それぞれ大きな共用中庭を囲む口の字配置の計画であり、戸数はそれぞれ約100戸、住戸の合計床面積は約1万5千平方メートルを超えるという大規模プロジェクトであった。1941年秋に第一期工事が竣工したものの、東社宅と西社宅共に南側の棟は第二期工事となったため、実際は口の字型ではなく、コの字型での竣工であった。

東社宅は、5つの住戸タイプから成り、最大規模のA型は、一住戸が3層で、面積が300平方メートルを超える。また、B型、C型、D型では、3層の中に、1.5層分の天井高を持つ住戸を重ねるなど、各住戸の平面計画および空間計画においても、大変意欲的な創意工夫がなされた集合住宅である。西社宅でも4タイプの住戸が組み合わせられた。

1.3. 既往研究

住戸計画や空間構成を述べている既往研究としては、当時、前川國男建築設計事務所の上海分室においてこ

*国立近現代建築資料館 主任建築資料調査官、工学博士

の社宅を担当した大沢三郎による『建築』1961年6月号に掲載された記事³や松隈洋『建築の前夜 前川國男論』みすず書房、2016年⁴がある。後者には設計・建設の経緯に加えて、各住戸タイプの概要が説明されている。華興商業銀行総合社宅には、8頁がさかれているものの、図面が掲載されていないため、図面と対照しながら各住戸タイプの概要を理解することはできない。

本稿は、これらの既往研究からわかる事実に基づき、収蔵図面を活用して、それらの内容を検証し、既往研究では明らかにされていない新たな知見を得ることを目指した。

1.4. 収蔵資料について

1.4.1. 図面資料の全体像

収蔵資料は、図面が主であるが、先述の展示に際しては、前川建築設計事務所が保管する写真アルバムの展示も行った。両者ともに、奇跡的に国内に持ちかえられ戦禍を逃れることができた、貴重な資料である。

図面は、2019年以降に前川建築設計事務所から、資料館に寄贈されている。その際、前川建築設計事務所に保管されていた華興商業銀行総合社宅に関連する図面は、すべて資料館に寄贈された。大半の図面は、フィート・インチ法の縮尺を用いて、A1サイズの和紙に鉛筆で描かれており、前川國男建築設計事務所による図面番号(4桁の数字)が付されている。資料館では、収蔵後に、管理上の整理番号を付しているが、本稿では、図面番号を用いて[図面番号]という表記により説明を行った。そのうえで、末尾に図面番号と資料館整理番号の対照表(表1)を付すことにより、今後の研究において資料館の収蔵図面へのアクセスが容易になるように配慮した。

1.4.2. 東社宅に関する図面資料

まず、図面は、東社宅(日本人行員用)と西社宅(華人行員用)に大別される。

東社宅に関しては、作成年月順に、図面[1033](昭和14年11月20日)から図面[1168](昭和16年7月16日)までの番号が振られており、欠番(当初番号が振られてであろうが、保管されていなかった図面)もあるので、計103枚である。大半が、昭和14年11月20日から、昭和15年11月20日までの間に作成されている。これらの図面は、基本設計の詰めの段階から、工事と並行して進められた実施設計期間に作成されている。図面番号の始まりが、[1033]という半端な数であることはやや奇妙であり、図面[1033]より前の基本計画段階でのスタディ

図面も描かれたはずであるが、それらは何らかの理由で残されていないと考えることが自然であろう。

住戸の5つの型すべてについて、1:8"=1'(メートル法で描かれた図面の1/100に相当する。正確には、1/96)で描かれた平面図、立面図、断面図に加えて、1:2"=1'で描かれた平面詳細図、展開図、矩計図が残されている。構造図、設備関連図(電灯器具及カーテン配置図)は、1:8"=1'で描かれている。また、外構図、外構遊具、室内移動家具も残されている。

1.4.3. 西社宅他に関する図面資料

西社宅は、図面[1301](昭和15年1月27日)から図面[1345](昭和15年12月24日)までの内、28枚が残っており、図面の種類や内容、作成された時期は、東社宅とほぼ同様である。更に、図面[7305]から図面[7307]の番号をふられた高架水槽関連の図面3枚がある。これらは、昭和15年6月に描かれ、1/100, 1/20という縮尺が用いられている。加えて、図面番号と日付のない図面4面がある。すべてを合計すると、137枚になる。

2000番台から6000番台の図面は収蔵されていないが、それらの番号付された図面が描かれたか否かは定かではない。

1.4.4. 写真アルバム

写真アルバムは、資料館の収蔵ではなく、前川建築設計事務所が保管している。プロジェクトを担当した大沢三郎が残したA4版の写真アルバムであり、中の94頁の台紙に、各頁3~5点の写真が貼られている。ほぼ時系列順に整理されており、工事中の記録写真に始まり、最後は外観竣工写真、内部竣工写真も含まれる。これらの竣工写真に関しては、どこを撮影した写真であるかという点についてのキャプションは付されていない。竣工写真については、撮影箇所を特定できる写真を掲載することで、今後の研究のための基礎資料としたい。

2. 住戸配置計画の概要

東社宅(日本人行員用)と西社宅(華人行員用)は、それぞれ大きな共用中庭を囲むコの字配置の計画であったが、ある時点から、一部が第二期工事となり、結果的にはコの字型となったことが知られている⁵。この変更がどの時点でなされたかを、図面を通じて検証してみよう。

東社宅に関しては、2つの街区にまたがった計画であり、その全体を示す配置図[1153](図1)が残っている。配置図として描かれたというよりは、昭和15年10月23日に描かれた東棟住宅庭園計画図であり、建築工事

が進む中で、庭園部分のデザインを描いた図面である。図面の上がほぼ北側であり、後述するように、右からコの字棟（すでに、コの字に描かれている）の街区（ここには、B～E型の住戸が配置される）、その左が、A型の南北に伸びる棟、その左上に高架水槽、広い菜園と思われる場所が広がり、左上にはテニスコート3面が描かれている。

西社宅の配置は、西社宅庭園計画図 [1334]（図2）に示されている。昭和15年10月4日なので、東社宅とはほぼ同時期に、外構計画がなされていたことがわかる。図面の上がほぼ北側であり、右から、コの字棟（すでに、コの字に描かれている）その左上に高架水槽、広い菜園と思われる場所が広がる。

この地区の幹線道路である松井通りを挟んで、100M以上離れた西側に建てられたといわれているが⁶、そうした配置を明確に示す図面は残っていない。しかしながら、写真アルバムの一組の写真（写真1）を見ると、東社宅を南側から撮った写真の左端に、明らかに西社宅とわかる施設が写っている。正確な距離は明らかではないが、かなり離れた西側に建てられたという事実はこの写真では確認できる。

3. 東社宅の住戸構成と平面計画

3.1. コの字からコの字への変更

図面を精査することで、どの時点で、コの字からコの字への変更がなされたかという点を考察してみたい。

まず、全体を描いた平面図の内、図面 [1039]（昭和14年12月6日）（図3）では、コの字の三階全体が記載され、第二期工事になる南側の棟について、第二期工事という記載は見当たらない。一方、図面 [1080]（昭和15年1月31日）（図4）は、全体の2階の平面図であり、南側の棟には第二期工事の記載がなされている。

立面の検証を行う必要もあるだろう。図面 [1044]（昭和14年12月11日）（図5）では、南棟（コの字の場合、図面上、下側に来る棟）については、異なる筆跡で、第二期工事の追加記載がある。これらから総合的に判断すると、昭和14年12月から翌年1月にかけて、南棟を第二期工事とする決定がなされたと考えられる。要は、実施設計が本格化する直前の時期であると思われる。

3.2. 5タイプの住戸平面と組み合わせ構成

3.2.1. A型住戸

東社宅は、A型からE型の5つの住戸タイプから構成されていたことは先述した通りであるが、各タイプの

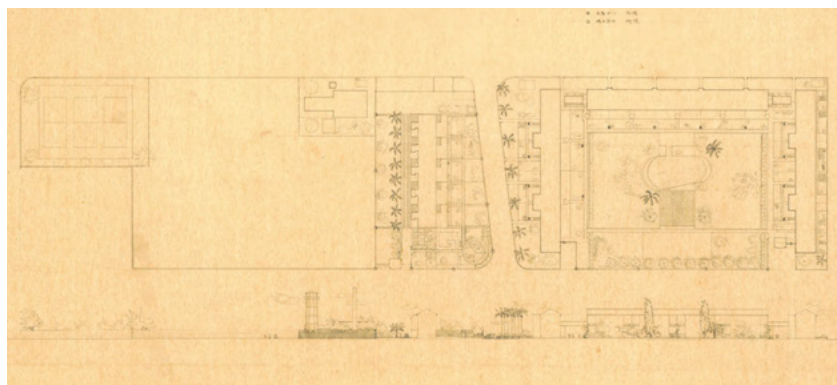


図1 東社宅全体配置図（元名称：東棟住宅 庭園計画図）[1153]

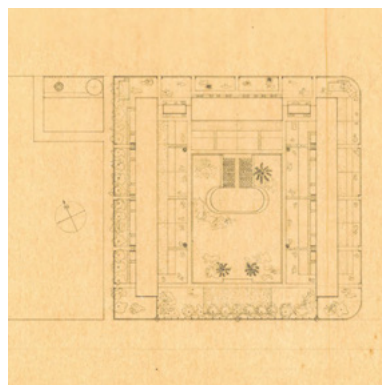


図2 西社宅配置図
（元名称：西社宅庭園計画図）[1334]



写真1 東社宅と西社宅（左遠方）の全景 昭和15年12月13日（台紙83）

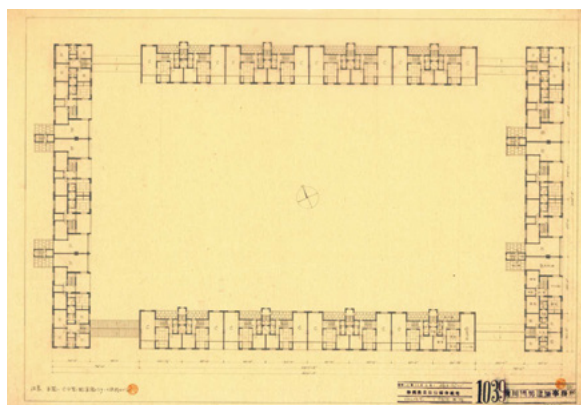


図3 日本人住宅 平面図三階 [1039]
左下に、「本図ハCD型ノ配置図トシテノミ使用スベシ」と記載がある。

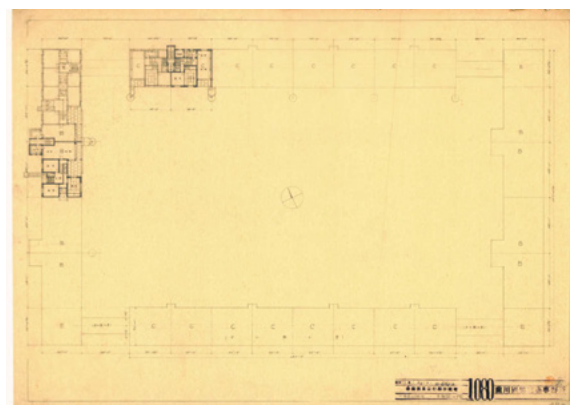


図4 日本人住宅 平面図二階 [1080]
南側の棟(繋ぎ棟も含め)に第二期工事と記載あり。

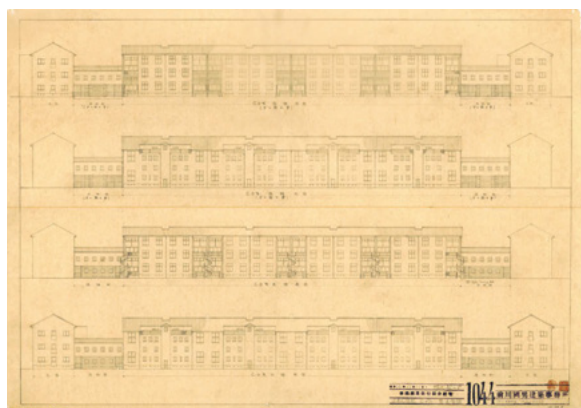


図5 日本人住宅 C・D型立面図 [1044]
南棟と北棟の南北立面図。

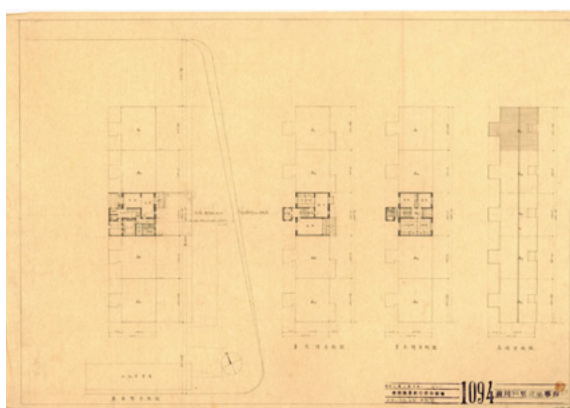


図6 日本人住宅 A型 平面図 [1094]

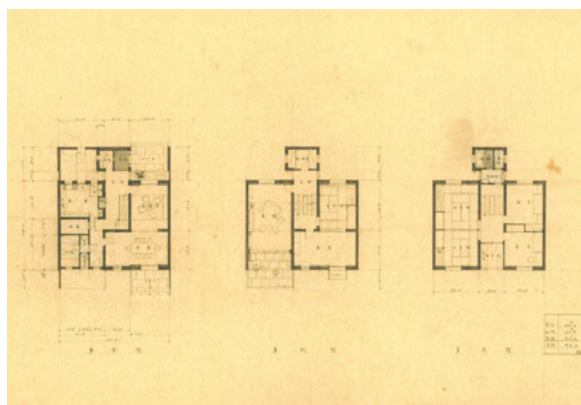


図7 日本人住宅 A型 平面図 [1093]

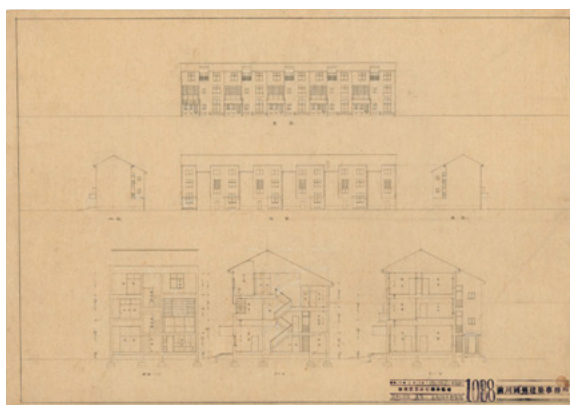


図8 日本人住宅 A型 立面図及断面図 [1088]

住戸平面および配列のされ方を図面にて確認する。

A型は、配置図を兼ねた平面図 [1094] (図6) でわかる通り、3層の連続長屋方式の住戸であり、口の字型住棟の隣の敷地において、南北方向に一行に5住戸配列された。図面 [1093] (図7) は、図面 [1094] を右回りに90度回転させた方向 (図面の下が東になる) に描かれているが、この図面からより詳細な平面構成がわかる。こ

の図面に記載されている面積表を見ると、一戸の各階が30坪強であり、一戸当たりの合計は93坪になり、この社宅の中で、最大規模を誇る。

図面から内部の構成をたどってみよう。まず、西側に玄関を設け、中央の階段室が主動線になる。図面 [1088] (図8) の中の断面図1'-1、2'-2'を見ると、3階ではあるが、すべて同じ階高ではなく、1階南西側 (図面

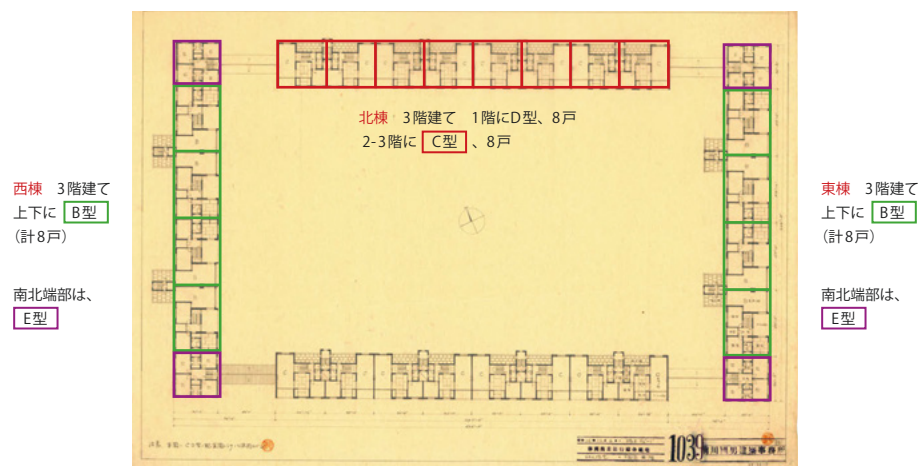


図9 B-E型住戸配置ダイアグラム
(元図は、日本人住宅 平面図三階 [1039]) B-E型住戸の色分けは筆者が行った。

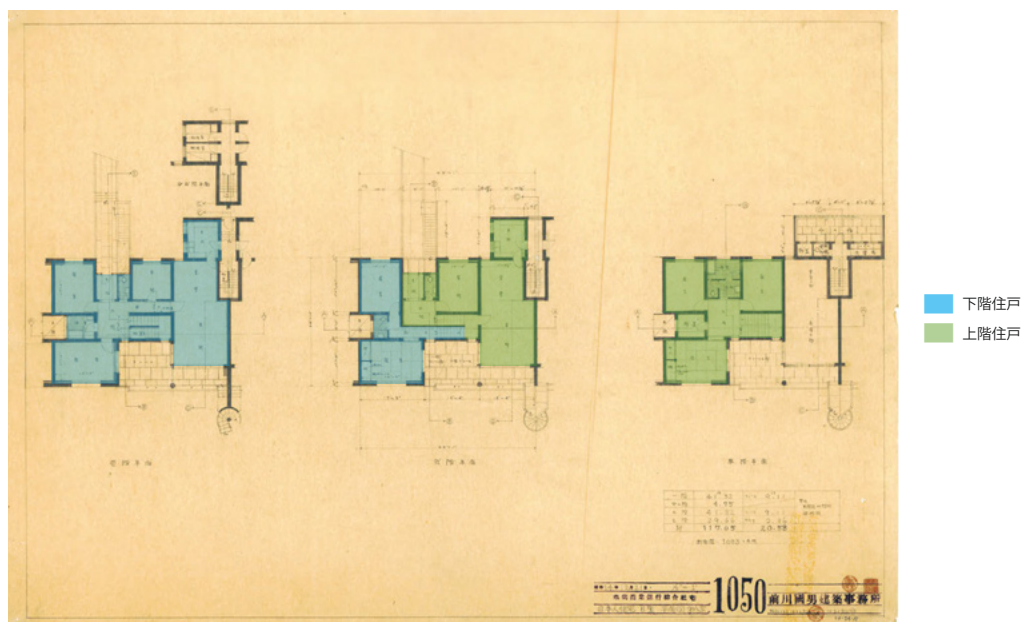


図10 日本人住宅 B型 平面図 第八案 [1050]
上階住戸と下階住戸の色分けは筆者が行った。

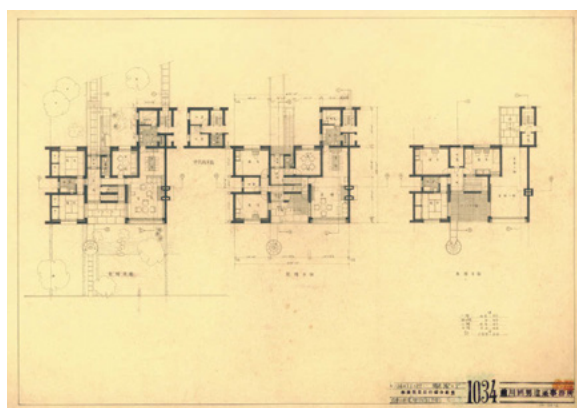


図11 日本人住宅 B型 標準平面 [1034]

では上)の玄関、広間、台所や使用人室の上部の床面を約70cm下げること、断面図2'-2'に見られるように、スキップフロア的な構成を導入するという、巧みな断面構成がなされている。それにより、2階の居間の床が下がり、居間においては、約5m近い高さの天井高が確保されることとなった。

2階の居間の前の広いテラス、玄関前の凹型のポーチ、台所への通用口を中庭化するなど、随所に、平面的かつ立体的な工夫がみられる。単に規模が大きいだけでなく、立体的な空間的工夫がみられる点は特筆に値する。

3.2.2. B型住戸

B型からE型は、コの字型の棟の中で使用されている。三階平面図[1039]を基にして、B型からE型の住戸が使用されている個所を示したB-E型住戸配置ダイアグラム(図9)を作成したので、参照しながら分析を進めていきたい。最終的には、コの字になるが、ロの字であった場合を想定して、分析を進める。その際、図面にならって北棟は図面上上側の一辺の棟を指し、同様に、時計回りで、東棟、南棟、西棟と呼ぶことにする。

B型は、3層の中に、二戸が納まる独特の構成であり、住戸配置図(図9)に示されるように、東棟と西棟において、端部のE型を除き、各棟とも、平面的に4区画ずつ、上下二戸ずつなので、計8戸が納められ、東棟と西棟と併せて、16戸になる。

昭和14年12月21日作成の図面[1050](図10)が、B型の最終形であり、第八案と記されている。第八案なので、この案に至るまでに、数多くのスタディがなされたものと推察される。ちなみに、残存しているスタディ段階の図面では、昭和14年11月27日に作成された図面[1034](図11)があるが、この図面では、名称の末尾の第八案が消された跡があるので、第七案ということではなく、あくまで、第八案内に属する先行案と考えるべきスタディ案である。先の三階全体平面図[1039](図3)をよく見ると、B型として、この先行案が書き込まれており、図面左下には「本図ハCD型ノ配置図トシテノミ使用スベシ」という注意書きもある。全体平面図でこの先行案が使用されていること判断すると、一度は、この先行案を進めることが決まったのではないかと思われる。

先行案以前の案を示す図面は残っていないので、ここでは第八案の先行案と最終案を比較検討してみたい。理解を容易にするため平面図[1050](図10)の上階と下階を色分けした。まず共通点としては、①西側に玄関

が設けられ、上階は外部階段で上がった2階に玄関がある、②下階、上階とも居間は、1.5層分の天井高をもち、そのため、2階居間は半階上がったスキップフロアの構成になる、③東側に2階居間のレベルに大きなテラスを設け、西棟では、そこから地上への螺旋階段も備える(東棟では、この螺旋階段は作られていない。立面図にも記載なく、写真でも見当たらない。図12、13参照)、④西側には、主として使用人のための階段が設けられ、居間の高さをさらに2分割して台所や使用人室、物干しを設ける(この点は、立断面図のC-C断面図で理解される)、⑤主要諸室構成は、居間・食堂、客間、寝室・和室であり、下階では寝室・和室が4室であるのに対して、上階では、寝室・和室が3室である、⑥南側の戸境壁(図面上、左)には、水回り室のために小さな光庭が設けられている。

一方、第八案の先行案と最終案の相違点を整理すると、①中央の内部階段が最終案では、行ってこい階段の2列の中に納めており、先行案では階段に3列用いていたことに比べて、より合理的な階段室構成となった、②外部螺旋階段の位置が変更となり、先行案だと1区画ご

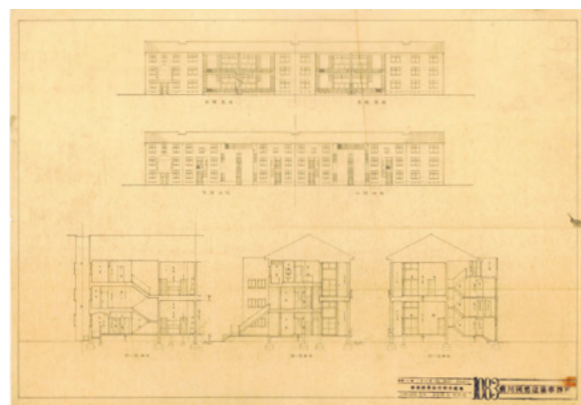


図12 日本人住宅 B型 立面図及断面図[1083]
西棟東面(左上)は螺旋階段があるが、東棟東面(右上)には、螺旋階段はない。



図13 日本人住宅 B,E型 立面図[1043]

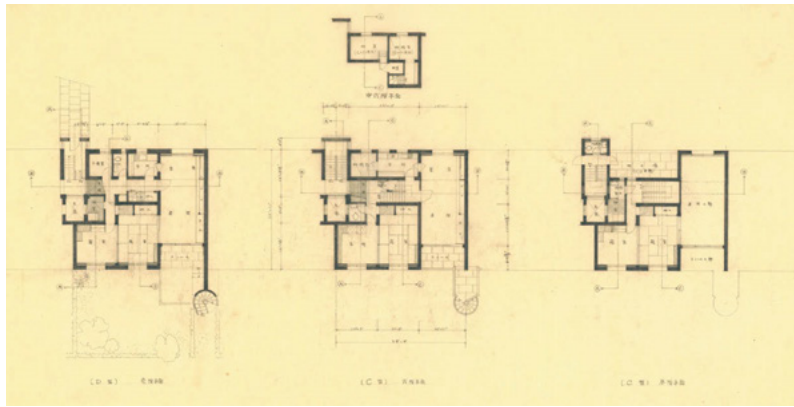


図 14 日本人住宅 C, D 型平面図 第五案 [1052]

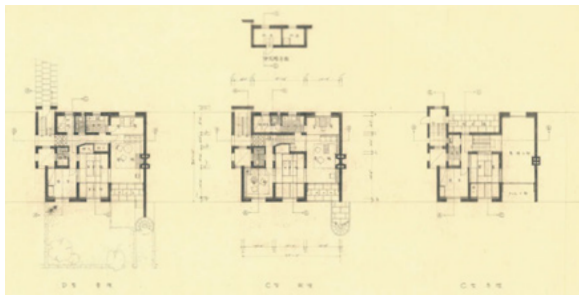


図 15 日本人住宅 C, D 案平面図 [1033]

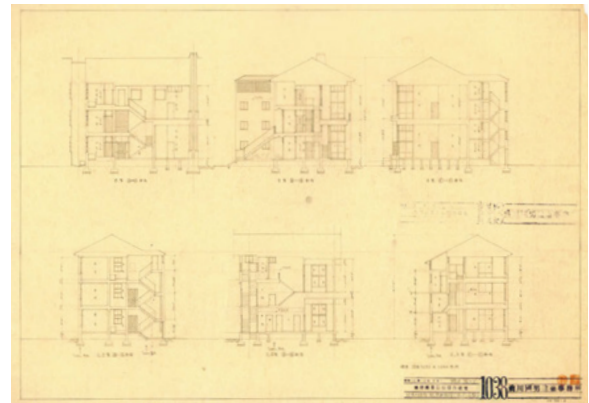


図 16 日本人住宅 規準断面図 (B, C, D 型) [1038]

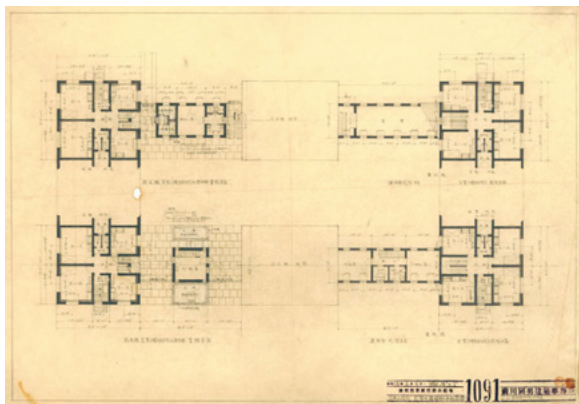


図 17 日本人住宅 E 型及連結部平面図 [1091]

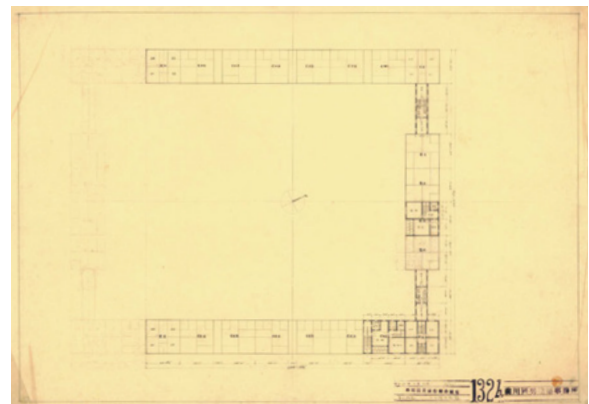


図 18 華人住宅 2 階平面図 [1324]
方位は右が北。

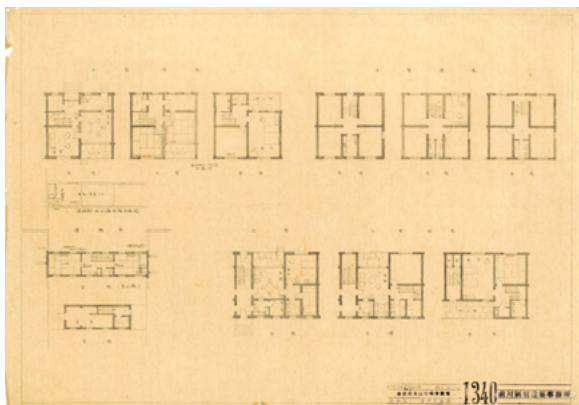


図 19 西社宅 各戸平面図 [1340]

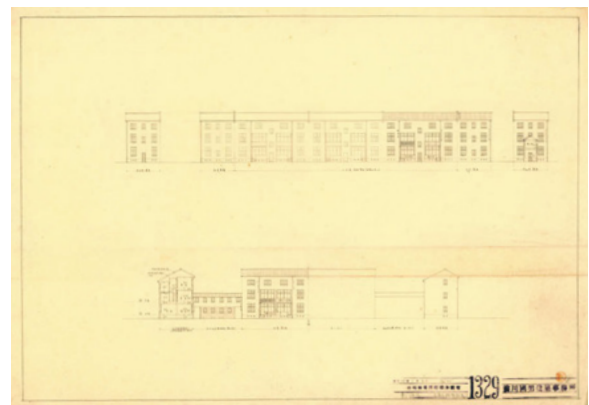


図 20 華人住宅 立面図及断面図 其ノ一 [1329]

とに螺旋階段が必要であったが、最終案では、2つの区画で一つの螺旋階段が共有できるようになった。スキップフロアや異なる階高の組み合わせなので、これらの階段をいかに合理的・経済的に計画するかが最後まで検討されたものと思われる。

面積的には、最終案では、上階下階併せて、2住戸の内部面積が117.05坪、テラスと物干しで20.58坪である。上下B型といっても、下階で寝室・和室が一部屋分多いので、面積的にも若干多くなる。その意味では、B型上階、B型下階と分けて分析すべきかもしれない。

3.2.3. C型住戸とD型住戸

CD型は上下に重なる一対の住戸タイプであり、D型が下階の一層を占め、C型がその上の2層分を占める。住戸配置図[1039] (図9)に示されるように、北棟と南棟それぞれに、8対ずつ納められている。

昭和14年12月26日作成の平面図[1052] (図14)に描かれたCD型第五案が最終案である。D型は、北側から入る共用階段室奥の玄関から入り、1階と中二階の一部を使用して、面積は、33.36坪である。居間・食堂は、B型同様、1.5階分の天井高をもつ。階段室奥に光庭が設けられており、階段室及び各回水回りへの採光換気貢献する。

C型は、共用機段を2階に上ったところに玄関を持ち、2階に客間と居室、半階上がって居間、食堂、台所、更に半階上がり、寝室が2部屋、北側に物干しスペースを備える。この寝室は、洋室と和室が連なり、和室からは居間を半階上がった高さから見渡すという、極めて立体的な空間である。全体の面積は51.13坪という大きさになる。

最終案の約一か月前の昭和14年11月20日に、平面図[1033] (図15)が作成されている。この先行案からの変更点は、詳細に見比べないと理解できないほどに微妙であるが、要は、2階から3階への階段の向きを変えることで、中二階の扱いがより合理的になったことである。中二階の一部(図面上右側)は、D型が一階からの階段で使う使用人室となり、中二階の残りは、C型が使う物置となっている。また、C型の2階の台所も広くなった。断面図[1038] (図16)、の右下図に、北側では天井高が抑えられていることがわかる。半階というスケールを持ち込むことで、居間食堂に高い天井高を確保しつつ、階段回りに無駄な空間が生じないよう、大変きめ細かい設計を行っていることがわかる。

CD型の全体の立面は、図6に示した通りであり、南棟は二期工事とされて、結局は建設されなかった。

天井高を1.5階分とした居間を作ることが目的であれば、すべてをB型にすることも考えられるが、居間食堂の天井高をすべて1.5階にするという趣旨は守りつつ、住戸面積の違い、テラスの広さの違いなどによって、バリエーションを作ることが意図されたと考えられる。

3.2.4. E型住戸

E型は東棟と西棟の南北両端に位置している。それらと、北棟の間には、連絡棟があるが2階建てであるため、北棟とは分節した見え方になる。昭和15年2月5日作成の図面[1091] (図17)に、1、2階の平面図が描かれている。E棟は、他の家族用の棟とは異なり、各階に4室の八畳の独身者室があり、4戸で便所と浴室を共有する。単純な平面とはいえ、浴室は外気に面し、便所は光庭(B型と共有)に面するなど、衛生面での配慮離されている。立面に関しては、図14、図16を参照されたい。

4. 西社宅の住戸構成と平面計画

西社宅(華人行員用)についても、住戸構成・平面計画を、図面参照しながら確認したい。住戸配置については、華人住宅 2階平面図[1324] (図18)で全体の把握ができる。この配置図は、図面の右側が北になるので、コの字平面の中央(図面上右)には、3階建ての連続長屋であるB型が4戸配置され、その両側には連続部2棟がある。

コの字平面の両翼は、図面上での上が西棟であり、下が東棟である。両棟とも端部にE型を3層に渡って配置し、中央には、1階にD型、2-3階にC型を6対ずつ配置している。

各住戸内部の平面については、西社宅 各戸平面図[1340] (図19)がわかりやすい。

B型は、北側玄関から入り、1階には、居間、食堂、台所、2階に8畳の和室2室と浴室、3階に、12畳の寝室と予備室、便所という構成であり、全体はほぼ55坪である。3階に小さな雇人室も設けられているので、華人行員の中でも役員クラスの住宅であったと推察される。東社宅で見られたように、居間の天井高を1.5階分設けるといった立体的な構成はなされていない。しかし、1、2階に南面した広いテラス、3階北側には物干場は設けられている。

C型・D型の組み合わせは、2対で内部階段室を共有し、入り口はすべて階段室経由で設けられている。華人住宅 立面図及断面図其ノ一[1329] (図20)の断面図から読み取れるように、ここでも居間の天井高を1.5階

分設けるといった立体的な構成はなされておらず、東社宅に比べると面積的にも小さいが、テラス付きの居間や寝室などの居室群をすべて東側に向けることで、居室の快適性を確保し、共有階段室から上がった3階の西側に物干場を設けるなど、使い勝手に対する配慮は十分になされている。

E型は、各階6畳程度の個室4個を組み合わせ、台所、便所、浴室は共有という、極めて簡潔な構成である。連結部にも、独身者2部屋が設けられて、台所、便所、浴室は共有となっている。

全体として、西社宅は東社宅に比べると、面積規模において、また、立体的な構成において、簡素なつくりであるが、採光換気を含め、生活上の快適さには十分な配慮がなされていることがわかる。

5. アルバム内写真の撮影箇所の特定

5.1. 外観写真

写真アルバムは、1.4.4において述べた通り、A4版であり、各頁3～5点の写真が貼られた94頁の台紙は、ほぼ時系列順に整理され、地鎮祭(1月6日)に始まり、工事中の多くの記録写真が納められ、最後は外観竣工写真、内部竣工写真も含まれる。各写真のタイトルは記載されていないが、整理番号が付され、撮影日付が記入されている場合もある。日付には、年は記載されていないが、工事期間を考えると、大半が昭和15年なので、昭和15年撮影の写真については年を記載せず、翌昭和16年撮影の場合は、年を記載した。

外部写真については、住戸計画や空間構成の理解の一助となる写真を11点抜粋し、簡潔な説明を加えることで、今後の研究の一助となるようにしたい。各写真については、撮影箇所、撮影日付(記載がある場合)、台紙番号を記載する⁷⁾。また、東社宅配置図[1153]に撮影箇所と撮影の向きを記載した図を、11点の写真の後に掲載した(図21)。

以下、順に各写真からわかることを解説する。尚、西社宅は、遠景にうつっているのみであり、近景写真は残っていない。以下、西社宅という特記がない限りは、すべて東社宅を指す。

[写真2] 東社宅と西社宅(左遠方)の全景、9月4日(台紙59)からは、この時期に、東社宅と西社宅共に躯体工事が終了していることがわかる。但し、足場や東社宅の中庭の工事中用仮設小屋が残っている。

[写真3] 工事中の中庭、正面は東棟(B型)の西面、11月4日(台紙79)では、既に足場がはずれたことがわかる。東棟(B型)西面が写っている写真が少ないので、東棟(B型)西面がわかる貴重な写真である。

[写真4] 南東から見たA型棟外観、12月3日(台紙82)。この写真の右側に、コの字型住棟が立つ。

[写真5] A型棟西面外観(台紙92)

[写真6] A型棟東面、昭和16年6月7日(台紙96)。コの字型住棟の西棟3階から撮影した写真と推測される。

[写真7] A型棟東面夜景(台紙87)

[写真8] 北棟(CD型沿い)に正面に西棟(B型)を見る、



写真2 東社宅と西社宅(左遠方)の全景(台紙59)



写真3 東社宅工事中の中庭、正面は東棟(B型)の西面(台紙79)



写真4 南東から見た
A型棟外観 (台紙82)



写真5 A型棟西面外観
(台紙92)



写真6 A型棟東面
(台紙96)



写真7 A型棟東面夜景
(台紙87)



写真8 右に北棟 (CD型)、正面に西棟
(B型) を見る (台紙96)



写真9 東棟から西棟を見る
(台紙85)



写真10 北棟外部螺旋階段
下から西棟を見る (台紙85)



写真11 中庭北西角
(台紙84)



写真12 西棟の西側外観 (台紙92)

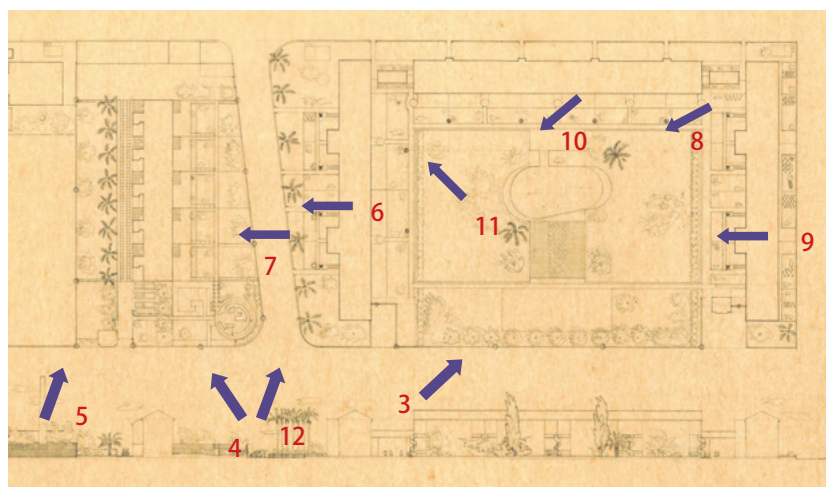


図21 撮影箇所記載図 (元図は、東棟住宅 庭園計画図 [1153])

昭和16年6月7日 (台紙96)。

[写真9] 東棟から西棟を見る (台紙85)。階段室の踊り場からの撮影と推察される。

[写真10] 北棟外部螺旋階段下から西棟を見る (台紙85)。

[写真11] 中庭北西角 (台紙84)。左が西棟 (B型)、中央が連結棟、右が北棟 (C, D型) (台紙84)。

[写真12] 西棟 (B型) の西側外観。この左側にA型棟が建つ (台紙92)。

5.2. 内部写真

写真アルバムには、竣工後の内部空間の写真が17点含まれている。しかし、残念ながら、写真の説明が記載されていないため、どの住戸の写真であるかは、簡単には判別できない。17点の内部写真について、平面詳細図や室内展開図も参照しつつ、開口部、家具などに着目しながら、部屋の特定するための分析を行った。その結果、どの住戸の部屋であるかが判明した写真を、A型住戸 (写真13～16)、B型住戸 (写真17～20)、C型住戸 (写真21～22) に分けて掲載した。



写真 13 A型住戸、1階食堂
(台紙 88)



写真 14 A型住戸、1階応接室
(台紙 88)



写真 15 A型住戸、1階台所
(台紙 88)



写真 16 A型住戸、2階居間
(台紙 89)



写真 17 B型住戸、1階玄関
内側 (台紙 90)



写真 18 B型住戸、居間から
食堂を見る (台紙 90)



写真 19 B型住戸、和室
(台紙 91)



写真 20 B型住戸、1階浴室
(台紙 90)



写真 21 C型住戸、居間から
食堂を見る (台紙 91)



写真 22 C型住戸、台所
(台紙 91)

6. 結

以上の分析を通じて、上海華興商業銀行綜合社宅の住戸配置計画、住戸内の平面計画と空間構成について、得られた知見を整理して述べてい

- 1) 図面の作成日時を調べることで、どの段階で口の字型からコの字型への変更がなされたかを知るための手掛かりが得られた。変更の理由は不明であるが、昭和15年冒頭という時点では、戦況が悪化していたとはいいがたいので、この時点で規模縮小が意図されたとは考えにくい。おそらく、口の字型であると中庭を活用した建材の搬入や保管などが行いにくくなるため、建設工事を容易に進めるために、南側の棟を第二期工事としたのではないかと推察される。
- 2) 5つの住戸タイプの特徴を、図面で具体的に確認し、変遷の一端も考察することができた。立体的な住戸

構成を短期間のうちにまとめることができた点は、驚くべきことである。理由や秘訣を考察したいが、収蔵図面は立体的な構成という方針がなされた後に描かれた図面であるため、立体的な住戸構成が生まれるまでの過程の分析は、本稿の目的を超えた問題である。しかし、設計の最終段階においても、立体的な構成を意図しつつ、合理的な空間利用を達成するために、断面と平面をスタディし続けていたことは、明らかになった。

- 3) 図面の枚数、描き方の特徴については、基本図が

1:8"=1' (通常の1/100に相当する。正確には、1/96) は一般的であろうが、平面詳細図、展開図、矩計図が1:2"=1' (1/24) という縮尺で描かれており、正確な図面を描くということへの強い思い入れが感じられる。家具図や遊具図も作成されている。これらのことが、当時一般的であったかどうかを調べることも今後の課題である。

- 4) 工事記録写真の分析を通じて、東社宅と西社宅の立地の関係を理解することができた。また、工事中的写真ではあるが、東社宅の東棟の西側 (中庭側) の貴重な写真を発掘できた。更に、平面詳細図や室内展開図も調べることで、内部写真のいくつかを特定することができた。

尚、国立近現代建築資料館「令和3年度収蔵品展「住まい」の構想 収蔵資料が物語る名作住宅1940-1975」にて、上海華興商業銀行綜合社宅の図面が展示されていた2022年1月に、中国人研究者から前川建築設計事務所宛てに、華興商業銀行綜合社宅が現存して使用されているという情報と写真がメール送信されてきた。情報の真偽は未だ確認できていないが、現存していれば、更なる研究の発展が可能となるだろう。

注

- 1 期間中4枚の図面展示を行った。加えて、1か月間の特別展示（マンスリー展示）には、さらに8枚、計12枚の展示であった。併せて、1.4.4で述べる写真アルバムの全頁をスライドショーにて映写した。
 - 2 設計から工事の期間については、田中誠「上海の前川事務所」『建築雑誌』1985年1月号、35頁において、「設計は14年8月から始めて翌年の春に着工、16年秋に竣工していると思う」と述べている（14年は昭和14年を指す）。しかし、1.4.4で述べる大沢三郎作成の写真アルバムにおいて、撮影日が記録されている写真を見る限りでは、1月6日が地鎮祭であり、建物自体は年末にはほぼ完成しているように見える。本稿では、基本的には、田中の記述に従うが、着工は14年1月とした。
 - 3 大沢三郎「上海華興商業銀行綜合社宅」は、『建築』1961年6月号49頁に掲載された半頁分の記事であるが、設計及び設計管理に直接携わった人物の記事であり、貴重である。
 - 4 松隈洋『建築の前夜 前川國男論』みすず書房、2016年
- は、上海華興商業銀行綜合社宅を知る上では、最も詳しい資料である。但し、本文中に述べた通り、図面の掲載はなされていない。
- 5 松隈洋、前掲書、368頁において、第二期工事部分が建設されなかった理由を、戦況の変化や施設が十全足る形で使用されなかったという状況を推論している。戦況の変化による工事中止は大いにありうる理由であろう。但し、前川建築設計事務所に残る他の資料では、施設は竣工後、適切に使用されていたようである。
 - 6 松隈洋、前掲書、263頁
 - 7 写真アルバムには、台紙番号が付されていないが、アルバム全頁をデジタル化した際に、画像名称に台紙番号が付されている。本稿では、この台紙番号を使用する。尚、写真アルバム自体は、前川建築設計事務所が保管しているが、アルバムのデジタルデータは、前川建築設計事務所と資料館の双方にて保管されている。

謝辞

前川建築設計事務所 橋本功所長には、上海華興商業銀行綜合社宅の図面を含む前川國男資料のご寄贈をいただき、当資料館開催の「令和3年度収蔵品展「住まい」の構想 収蔵資料が物語る名作住宅1940-1975」においては、写真アルバムの貸出および展示をご了承いただいた。こうした常日頃のご協力に心から感謝申し上げる次第である。本稿が上海華興商業銀行綜合社宅に対する理解と知見を広げることに貢献できることを切に願っている。

（2022年5月8日原稿受理）

表1 本稿図番号と図面番号（前川國男建築設計事務所）およびNAMA整理番号の対照表

本稿図番号	図面番号	図面名称	作成年月日			NAMA整理番号
			昭和年	月	日	
1	1153	東棟住宅 庭園計画図	15	10	23	24-84-91
2	1334	西社宅 庭園計画図	15	10	4	24-84-119
3,9	1039	日本人住宅 平面図三階	14	12	6	24-84-7
4	1080	日本人住宅 平面図二階	15	1	31	24-84-35
5	1044	日本人住宅 C,D型立面図	14	12	11	24-84-9
6	1094	日本人住宅 A型 平面図	15	2	8	24-84-48
7	1093	日本人住宅 A型 平面図	15	2	7	24-84-47
8	1088	日本人住宅 A型 立面図及断面図	15	2	12	24-84-42
10	1050	日本人住宅 B型 平面図 第八案	14	12	21	24-84-15
11	1034	日本人住宅規準平面(B型)	14	11	27	24-84-2
12	1083	日本人住宅 B型 立面図及断面図	15	1	25	24-84-37
13	1043	日本人住宅 B,E型 立面図	14	12	7	24-84-8
14	1052	日本人住宅 C,D型平面図 第五案	14	12	26	24-84-17
15	1033	日本人住宅 C・D型平面図	14	11	20	24-84-1
16	1038	日本人住宅 規準断面図(B,C,D型)	14	12	5	24-84-6
17	1091	日本人住宅 E型及連絡部平面図(変)	15	2	5	24-84-45
18	1324	華人住宅 二階平面図	15	2	26	24-84-112
19	1340	西社宅 各戸平面図	15	10	20	24-84-125
20	1329	華人住宅 立面及断面図 其ノ一	15	3	2	24-84-115